

がん社会 を診る

中川 恵一

毎年、100万人以上の日本人が新たにがんを診断されていますが、その約3割が20〜64歳の働く世代です。この年齢のがんの罹患（りかん）者は2000年から10年で約9万人増えました。働く60代の増加など「働き手の高齢化」が背景にあると考えられます。

働くがん患者にとって、気がかりの一つが子供のことで。サラリーマンが、がんに罹患すると3割が離職し、自営業者の場合には17%が廃業しています。収入も4割にまで落ち込むというデータもありますから、教育費の工面も心配のタネになります。

子育て世代の親が、がんを診断されるケースは増えています。国立がん研究センターの研究グループが15年に発表した推計では、18歳未満の子を持つがん患者は年間約5万6000人生じており、その

子育て世代の患者増える

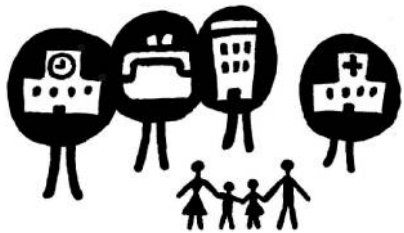
子供の数は約8万7000人に上るとしています。がんになった親の平均年齢は男性46・6歳、女性43・7歳です。子供の平均年齢は11・2歳で0〜12歳までが半数を超えることがわかりました。

父親のがんは胃がんや肺がんなどが多く、その傾向はがん患者全般とあまり違いはありませんが、母親の方は乳がんが約4割と圧倒的に多いのが特徴です。これは他のがんと異なり、乳がんのピークが40代後半の子育て世代だからと考えられます。

18歳未満の子供を持つがん患者が多くなった背景には晩婚化と出産年齢の上昇があると思われます。がんは細胞の老化といえる病気ですから、年齢とともに増えていきます。子供を持つ年齢が上がれば、小さな子供を持つがん患者が増えるのは当然です。

日本人の平均初婚年齢は1975年では男性27・0歳、女性24・7歳でした。しかし2000年には男性28・8歳、女性27・0歳。14年には男性31・1歳、女性29・4歳と晩婚化が進んでいます。第1子出産時の母親の平均年齢も、1975年の25・7歳から2000年は28・0歳、14年には30・6歳と上昇を続けています。

国立がん研究センターの推計は09〜13年の5年間の調査に基づくものですから、現在、子育て世代のがん患者はもっと増えているはず。治療と仕事、それに子育ても並立させる仕組みが求められます。（東京大学病院准教授）



イラスト・中村 久美